



Title	近世・近代広東珠江デルタの由緒言説
Author(s)	片山, 剛
Citation	歴史学研究. 2008, 847, p. 23-31
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27129
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近世・近代 広東珠江デルタの由緒言説

片 山 剛

はじめに

- I 近世—広府人の誕生と珠璣巷伝説—
- II 近代—優勝劣敗史観の受容と由緒言説の変容—
むすびにかえて

はじめに

紀元前3世紀の秦の始皇帝による天下統一以前、現在の広東省珠江デルタ地域には、現在のベトナム北部地域と同じく、「越人社会」（以下、カッコ略）¹⁾が存在していた。そして、始皇帝による越人社会の征服、秦末における南越国の独立と続いたあと、紀元前2世紀の前漢武帝による南越国の征服以降は、10世紀の五代における南漢国の独立を除き、珠江デルタ地域は一貫して中国王朝の版図であった。そのため、当該地域の主要居住民はかなり昔から漢族であった、と中国史研究者であっても思いがちである。しかし、漢族が当該地域の主要居住民となり、漢族社会が成立するのはかなり遅く、明代の16世紀ごろであった²⁾。

ここで、16世紀の珠江デルタ地域に登場した漢族とは、広府人と呼ばれる漢族のサブ・グループである³⁾。広府人は珠江デルタ本体を中心に、清代の行政区画でいえば広州府や肇慶府等に分布し、その言語は粵語（あるいは広州話）と呼ばれる漢語方言である⁴⁾。本稿では、広府人が歴史の舞台に登場してくる⁵⁾際に作られた、かれらの出自にかんする伝説をとりあげ、そこに込められた意味や作られた目的を解明し、また、近代におけるこの伝説に対する理解の変化を考察することにしたい。

以下ではまず、主に筆者のこれまでの研究⁶⁾にもとづき、珠江デルタ地域とその周辺における社会の基本的構図を、地形にもとづく生業・担い手の類型から示し、つぎに各類型の担い手と歴代王朝との元

末までの関係史の概略を示し、珠江デルタ地域における広府人登場の意義を明らかにしておこう。

地形にもとづく生業・担い手の類型は大きく3種類に分けられる（次頁の表参照）。第一類型は山地である。ここでは非タイ語系の^{ヤオ}苗族が移動しながら焼畑農業を行い、雑穀類を栽培している。第二類型は低湿地を除く山麓・丘陵・台地などの平地（平地1と呼ぶ）である。ここでは定住の稲作が、土着のタイ語系の^{トシヤオ}峒獠および秦漢時代以降に北から移住してきた漢族によって行われている。峒獠と漢族とは、生産・生活空間と生業を同一にすることから、次第に通婚等を通じて相互同化していく。この相互同化によって生まれた人々は、『旧唐書』では「土人」と呼ばれている。以上の第一と第二の類型は、いずれも9世紀以前の技術に依拠する類型である。

第三類型はデルタなどの低湿地（平地2と呼ぶ）である。濱島敦俊氏によれば、東アジアにおける低湿地の開発は10世紀の江南デルタに始まり⁷⁾、その技術はその後次第に国内各地や東アジアの近隣諸国に広まっていく。珠江デルタでも宋代以降に技術が導入され、徐々に開発されていくが、開発が本格化するのは明代である。そして、この開発に従事したのが「土人」から転化した広府人である。

つぎに、元代までの珠江デルタ地域の住民と王朝との関係について整理しておこう。住民と王朝との関係は、①化外の民、②〈中間的存在〉、③「齊民」（以下、カッコ略）の3種類に大別できる。①化外の民とは、中国王朝との関係をまったくもたない者である。③齊民とは、中国王朝によって戸籍に記載され、かつ徭役・税糧（土地税）等を正規に負担する者を指す。②〈中間的存在〉とは、中国王朝との関係をもってはいるが齊民ではなく、羈縻政策や土司・土官制度などの間接統治の政策や制度によって

表 技術・地形・生業・担い手による分類

技術	9世紀までの技術		10世紀以降の技術
地形	山地	平地1 (山麓・丘陵・台地)	平地2 (低湿地)
生業	移動, 焼畑, 雑穀	定住, 水稲作	定住, 水稲作
担い手	非タイ系の獠族	「土人」とタイ系の峒獠 (のちには広府人)	「土人」から転化した広府人

“公認された特別待遇”を受ける人々を指す筆者独自の用語である⁸⁾。なお、珠江デルタ地域のような漢族と非漢族が接触する地域では、各類型の担い手と王朝との関係を固定的に考えるのではなく、担い手が王朝に対してもつベクトルの向きや大きさを考慮する必要がある。

さて、始皇帝や前漢武帝による征服以降、珠江デルタ地域においても、華北からの移住民が齊民として戸籍に登録され、徭役・税糧等を正規に負担することになったと思われる。ただし、少し詳しい状況がわかるのは唐代からである。唐代には、「土人」と非漢族の峒獠との2種類が存在していた。このうち峒獠は、唐代には羈縻政策によって〈中間的存在〉の地位を享受していたと思われる。唐が滅んだあとの五代に、峒獠は独立勢力として南漢国を建国するが、南漢国はやがて北宋によって統一される。北宋は、中国から独立したベトナムへの対策として、ベトナムと国境を接する欽州については羈縻政策を継続し、峒獠に〈中間的存在〉の特権を与えたが、珠江デルタ地域など、それ以外の峒獠地区では齊民化政策を実施した。しかし実際には、宋元時代を通じて、齊民から離脱する峒獠が多数存在していた。他方、唐代の「土人」の地位は齊民であった。ただし前述したように、「土人」と峒獠は生活空間や生業が同一であり、かつ人口数は峒獠が圧倒的に多いため、「土人」は峒獠の動向に左右されやすく、峒獠が反乱を起こすとこれに加わる傾向があった。すなわち、「土人」は齊民の地位に恒常的には留まらず、齊民から離脱するベクトルを有していた。そして、かかるベクトルは、後述するように、明代まで存続していた。

以上、王朝側の齊民化政策にもかかわらず、元末においても峒獠は齊民化を拒否していた。また、「土人」は峒獠の勢力下にあつて、齊民の地位から離脱

する傾向を有していた。つまり、珠江デルタ地域では、元末に至っても、王朝に忠実な恒常的齊民がほとんど存在していなかったのである。かかる状況に大きな変化がおきるのが、広府人が顕著な形で登場してくる次の明代である。

ところで、日本の中国近世社会経済史研究は、1970年代までは江南デルタを対象とする研究が多数を占めてきたが、1980年代以降、江南デルタ以外の地域を対象とする研究が盛んになってくる。その結果判明したこととして、広大な中国では地域偏差が大きく、江南デルタでは一般的な現象であっても、必ずしもそれを全国に普遍化できないこと、これがある。本稿における行論との関係で、その一例として、里甲制の解体について触れておきたい。

里甲制は、人民に賦役黄冊と呼ばれる戸籍台帳を作製させ、それにもとづく徭役・税糧を負担させることを目的に、明初の洪武14年(1368)に、明朝によって全国的に施行された制度である。その終期について、かつては、18世紀初頭の清代雍正年間に解体したといわれていた。しかし、これは江南デルタの事例から導きだされたものであり、里甲制が18世紀に全国一律に解体した史実は確認されていない。本稿が考察対象とする珠江デルタ地域の場合、里甲制は、図甲制という名称で、明初の里甲制規定とは多少の相違を伴いつつも、20世紀前半まで存続していた。しかも、江南デルタでは里甲制が解体する18世紀に、珠江デルタでは却って里甲が増設されるという、江南デルタとはまったく逆の趨勢さえ窺うことができる⁹⁾。この点からも窺えるように、本稿での議論は、さしあたりは近世・近代の広東珠江デルタ地域に妥当するものであり、他の地域については別途に研究される必要があること、これをとくに中国史研究者以外の方々にお断りしておきたい。

I 近世—広府人の誕生と珠璣巷伝説—

1 広府人の誕生

明初の洪武14年(1381)、里甲制が全国的に施行され、齊民は里甲に帰属して徭役・税糧を負担することになった。そして、里甲に所属して徭役・税糧を負担することと連動して、齊民の戸籍における本籍地は「○県○都○堡第○図第○甲○○○戸」と、所属する里甲で表示された。なお、明初の珠江デルタにおける里甲制の実施状況については、史料が少なく、未詳な点が多いが、峒獠も「土人」も、制度上は齊民として里甲に所属することになったと思われる。しかし、宋元時代と同じく、峒獠は正統年間(1436~1449年)に齊民から離脱しようと反乱を起こし、「土人」の一部もこれに加わっていく。反乱の原因については断片的にしかわからないが、宋元時代と同じく、〈中間的存在〉への回帰を求めていると推測される。

これに対して明朝は反乱を鎮圧していくが、「土人」の一部、とくにデルタ低地に住む「土人」のなかには、反乱を鎮圧するべく、明朝の側に就く者が登場する。これがのちに広府人と呼ばれる人々である。峒獠とこれに加担する「土人」の反乱は明末まで続くが、最終的には明朝と広府人によって鎮圧されていき、峒獠の姿は珠江デルタ地域から次第に消えていく¹⁰⁾。

こうして明末には、珠江デルタ地域は明朝側に就いた「土人」=広府人の世界となり、広府人社会が成立していく。その場合、当該社会の成員資格としては、反乱が始まった正統年間以前から一貫して明朝に忠実であったことが重要になったと思われる。反乱鎮圧後に明朝に帰順した「土人」は、里甲所属の齊民とは区別され、「新民」として別系統で把握された¹¹⁾。すなわち、里甲制には編入されないのだから、里甲戸籍をもたない。したがって別言すれば、里甲戸籍をもつことが、正統年間以前から明朝に帰順していたことの証左になる¹²⁾。その結果、里甲に所属して里甲戸籍を有していることが、広府人社会における成員資格として意味をもつことになった。宋代以降の中国近世では、科挙合格の資格は世襲できない。また、祖先の財産は子孫間で均分相続されるの

で、世代を経るごとに目減りしていく。しかし、珠江デルタ地域の里甲戸籍は、目減りすることなく子孫に継承することのできる価値ある財となった。かくして珠江デルタ地域では、明朝の統治制度である里甲への所属や里甲戸籍の保有が、広府人社会における成員資格と密接に関係することになり、里甲制という王朝の制度が民間社会のなかに内在化されていく。これが、江南デルタと異なり、珠江デルタ地域で里甲制が長く存続することになった要因と考えられる。

さて、広府人は反乱鎮圧において王朝に忠実であり、また里甲制に対しては、齊民として所属することに価値をおき、離脱するベクトルはもっていない。その意味で、恒常的齊民ということが出来る。つまり、広府人の登場、そして広府人社会の成立は、珠江デルタ地域の歴史において、恒常的齊民とその社会が初めて成立した時点で画期的なものである¹³⁾。

さて、いままで史実にもとづいて述べてきた広府人の実像は、かれらが歴史の舞台に登場する際に作られた伝説の内容と符合しているか否か、また、この伝説は広府人の誕生とどのような関連をもつかについて検討することにした。

この伝説については、すでに多くの研究者が分析を試みているが、十分に解析されているとはいえない。未解明の謎のうち、最大のものは、この伝説が作られたそもそもの目的はなにか、また、この伝説に荒唐無稽な内容が多いのはなぜか、等である。この伝説を、明代珠江デルタという特殊具体的な歴史条件と関連させて、また漢族における由緒言説の一般的あり方とも関連させて分析し、仮説を提示することにした。

2 珠璣巷伝説

広府人の間に流布している有名な伝説として、南雄珠璣巷伝説がある。牧野巽氏によれば、伝説は遅くとも明中葉には成立し、明末清初までに普及したという。しかし、それは卑俗な内容が含まれる小説的、大衆的な説話であり、史実として全面的に信頼するのは困難とする¹⁴⁾。この指摘に対し、筆者を含む多くの研究者が同意している。また、本伝説に関する研究は、筆者の前稿を含めて、すでに多数のもの

のがある。にもかかわらず、本稿で改めて本伝説をとりあげるのは、前稿において、「ある民系の誕生について語っている伝説には、その民系が誕生する際の背景や誕生の意味が、大なり小なり反映されていると考えられる。そうでなければ、当該民系の間に浸透していくことはないであろう。また、伝説中にメッセージがあるからこそ、それを受容した者が当該民系に新たに参入していくことで、当該民系の拡大が可能となろう。その意味やメッセージのなかには、後代の子孫にとっては理解できなくなるものもあるかもしれないが、伝説が誕生・浸透していく時に生きた人々であれば、きわめて敏感な反応を起こすものであったろう」¹⁵⁾と書いた。そして、背景や誕生の意味として、恒常的斉民から成る社会の成立を理念としていることなどを明らかにしてきた。しかし、だれがこのメッセージの受け手なのか、本伝説が作成された目的はなにか、本伝説にはなぜ荒唐無稽な内容が含まれるのか、これらの点について、前稿では充分には解明できなかった。そこで本稿は、由緒言説の整理・分析という立場から、まず、前稿での到達点を整理し、そのうえで残った課題を検討することにしたい。

本伝説の「登場人物」は、広府人の祖先、珠江デルタにおける先住者、そして当時の王朝の3者である。伝説内容のうち、これら3者に関する部分を要約すると、以下ようになる¹⁶⁾。

史料1 「南遷来由」(黄慈博輯『珠璣巷民族南遷記』南雄県志辦公室排印本、1985年、17-33頁)

南宋末期(1273年ごろ)、祖先たちは広東省北部の南雄珠璣巷を本籍地とし、第十四図民籍に所属していた。しかしある事件¹⁷⁾を契機に、南雄府の役所から「路引」(転出証明書兼通行許可証)を発行してもらい、移住先を求めて珠江デルタ方面へ南下した。そして、岡州大良都¹⁸⁾古荫甲荫底村を過ぎた時に、路銀が底をついた。そこで「土民」の馮天誠・龔応達らが提供する草葺きの小屋に投宿し、宿泊・食事の接待を受けた。暫しの後、祖先たちは荫底村に定着するべく、県の役所に赴いて転籍を申請するが、その際に馮・龔の保証(「保結」)を得たうえで「路

引」を提出した。これに対して県は、図甲を増設して戸籍を定め(「増立図甲、以定戸籍」)、移住民のリーダー羅貴ら十名を新設する図の十甲の里長戸とし、残りの者を甲首戸とした。知県は、羅貴らがすでに草屋を建て、農地を所有しているのので、税糧を納め徭役を負担することを約束させた。

広府人の祖先について整理しよう。第一に、広府人の祖先の直接の出身地は南雄珠璣巷とされている。南雄珠璣巷は広東省北部に位置し、梅関を経て南嶺を越えれば華中の江西省、さらに華北の中原へと通ずる地理的位置にある。この点から、多くの先行研究が、本伝説は広府人の祖先が中原出身であることを暗示することで、その漢族アイデンティティを強調していると指摘する。第二に、広府人の祖先は、南雄珠璣巷での転出手続きと珠江デルタでの転入手続きを行っており、その移住は合法的なものである。第三に、広府人の祖先は、南雄珠璣巷では第十四図民籍に所属し、移住後には図甲(=里甲。注9参照)に編入され、リーダーの羅貴らは里長戸になっている。本伝説の時代設定は、表面上は南宋末に設定されているが、王朝の制度に関する時代設定は里甲制が存在する明代になっている。第四に、転入手続きの際に、図甲制に所属する斉民として、徭役・税糧を正規に負担することを知県に約束している。以上、第二・三・四から、本伝説における広府人の祖先像が、王朝の制度に忠実な斉民として描かれていることがわかる。

さて、本伝説を扱った研究の多くは広府人の祖先には言及するが、「土民」に注意するものはきわめて少ない。そこでつぎに、馮天誠・龔応達等の「土民」について整理しよう。羅貴ら広府人の祖先は珠江デルタ地域へ到着した後、路銀が底をついた。その時、「土民」は宿泊と食事を提供し、さらに羅貴らが転籍手続きのために県の役所へ赴く時には保証人となっている。ここで、図甲に編入される者(この場合は広府人の祖先)の保証人(この場合は「土民」)が、当時の王朝の斉民ではないとは考えにくい。そして、広府人の祖先のために図甲が「増立」されている点は、それ以前にすでに図甲が設置されており、それ

に所属する齊民が存在することを示唆している。そして、この既設の図甲に所属する齊民としては、まさに「土民」がふさわしいであろう¹⁹⁾。以上から、本伝説に登場する「土民」の特徴として、①珠江デルタ地域の先住者であり、②広府人の祖先に対して敵対的ではなく、保護・保証を与え、③里甲制に所属する齊民であり、④姓に見られるように、漢族文化を一定程度受容している、等を指摘できる。そして、かかる特徴をもつ「土民」は、唐代の「土人」の末裔と考えられる²⁰⁾。

珠璣巷伝説では、広府人の祖先と「土民」とがどちらも図甲制に所属する齊民となっており、「土民」が広府人の祖先に対し世話をするという点から、両者の同質性・親和性が描かれていることに注意したい。

3 恒常的齊民化への勧誘装置

さて、珠璣巷伝説には、明代珠江デルタに誕生した広府人の理念型を描写した内容とともに、荒唐無稽な内容も含まれている。なぜ荒唐無稽な内容が含まれているのか、この点を、伝説に「土民」が登場する意味とともに検討して、珠璣巷伝説が作られた目的について、仮説を提示することにしたい。

そこでまず、広府人の理念型について、二つの点から検討しよう。第一は、広府人の出自元である。伝説では、広府人は宋代に珠璣巷から移住してきた者と設定されている。したがって、伝説が示す理念に従うかぎり、「土民」には広府人となる資格がないことになる。しかし、前述したように、広府人の実際の出自元は「土人」＝「土民」であった。つまり、広府人の出自元にかんしては、伝説の理念と実際とが食い違っている。「珠璣巷出自」という条件は、後天的に獲得できるものではないから、もしこれを厳格に適用すれば、広府人の人口数拡大にとっては不利になるであろう。

第二は、広府人と王朝との関係である。これについては、伝説の指し示す理念と実際とは一致している。すなわち、伝説では、デルタ到着後に県衙門で転入手続きをする際に、里甲制に所属して徭役・税糧を正規に負担すること、すなわち恒常的齊民となることを知県に約束している。実際においても、珠

江デルタでは20世紀前半まで里甲制が存続していたし、また、広府人の族譜には、里甲制に所属して徭役・税糧を正規に負担することを標榜するものが多い²¹⁾。つまり、広府人は恒常的齊民であるべきという設定は、理念で求められているのみならず、実際に実現されていることがわかる。

ところで、伝説が示す理念にもとづくと、広府人社会は多数の恒常的齊民から成る社会となる。それでは、この多数の恒常的齊民はどのように調達されるのであろうか。伝説に登場する珠璣巷から移住してきた家族（戸数）は、わずか97戸にすぎない。史実によれば、広府人が誕生するころの珠江デルタ地域では、別稿で述べたように、峒獠が〈中間的存在〉への回帰を志向して反乱を起こし、また、「土人」も峒獠の動向に引きずられて反乱に加わる傾向があった。ただし一方で、デルタに所在する南海県の仏山堡・龍江堡や新会県の外海村などは反乱を鎮圧する側となり、明朝側に就いたことが判明する。しかし外海村は、当初は明朝側に就いたが、飢饉が起きると逆に反乱を起こしている²²⁾。つまり、現実において、デルタの住民（「土人」）には恒常的齊民＝広府人になる者もいたが、しかしそれは部分的にすぎず、みながこぞって恒常的齊民になる保証はなかったのである。このように、当時の「土人」には、恒常的齊民化へ向かうベクトルと、峒獠の反乱に加わるベクトルとの2つが存在していた。ここで、伝説における「土民」の設定が、峒獠と密接な関係をもつ役柄ではなく、自身が里甲制に所属し、かつ移住民の里甲制への帰属の世話をする役柄となっている理由を考えると、「土民」＝「土人」がもつ2つのベクトルのうち、恒常的齊民化へのベクトルを後押しして、「土民」が広府人となることを勧誘するためであったと推測できよう。

それでは、この伝説の筋書きが、単純素朴に「土民が広府人になる」にはならず、わざわざ珠璣巷からの移住者という架空の存在を登場させ、かれらが広府人となるという筋書きにしたのはなぜか。つまり、〈北から来た漢族が広府人となる〉という図式にこだわるのはなぜか。漢族拡大の実際のあり方とは異なり、「非漢族、あるいは非漢族と漢族との混血が、後天的に漢族に転化する」という図式を理念とする

こと、これを漢族は好まないようである。かれらは理念的に血統主義を重視する傾向が強く、「ある地域に漢族（のサブグループ）が存在するのは、中原などのいかにも漢族の発祥地からの移住によってである」のように、「先天的に漢族の血統を有する者が移住することで拡大した」という図式を好むようである²³⁾。

そこで、この理念と実際のギャップを埋め合わせるための方途が、伝説に荒唐無稽な要素を加えることであったと思われる。これによって、伝説全体を厳格に読解・適用する必要はなく、弾力的に読解・適用してよいことが暗示される。具体的には、先天的要件である「珠璣巷出自」は、「珠璣巷出自」と仮構することを通じて、後天的に獲得できることが示唆される。つまり、この伝説は、「恒常的斉民となることが肝要である。元来の出自は問わないが、恒常的斉民＝漢族となるなら、出自は珠璣巷と自称すべきである」という条件で、「土民」に恒常的斉民（広府人）となることを勧誘するために作られた装置と性格づけることができよう²⁴⁾。したがって、この伝説を受容した人々から成る広府人社会とは、伝説が指し示す理念に合わせるために、必要に応じて自分たちの出自を仮構している人々から成る集団といえよう²⁵⁾。

Ⅱ 近代—優勝劣敗史観の受容と由緒言説の変容—

列強による中国分割（「瓜分」）と種族滅亡（「種滅」）の危機を迎えた清末の20世紀初頭に、社会進化論の影響を受けた漢族ナショナリズム²⁶⁾が生まれてくる。石川禎浩氏によれば、漢族ナショナリズムを醸成した装置のひとつとして「漢族西方起源説」がある²⁷⁾。これは、古代の中国には土着の苗族（＝非漢族）が住んでいたが、西方の古代バビロニアから、漢族が黄帝に率いられて中国にやってきて、苗族と民族闘争を行い、その結果の優勝劣敗によって苗族を征服し、中国を漢族が住む中国とした、という説である。そして、この漢族西方起源説は、改良派・革命派を問わず、清末の知識人に受容されていく。というのは、当時の「瓜分」「種滅」の危機のなかで、かれら知識人は、西洋諸民族が漢族よりも相対的に優れた文明レベルにあることを肯定せざるを

えなかった。しかし、漢族としての自尊心を保持するには、序列化・差異化を行って自民族よりも劣位なものを設定する必要があった。かかる時期に、苗族を土着の劣位者とし、漢族を外来の偉大なる征服者＝優位者とする「漢族西方起源説」は、改良派・革命派を問わず、かれらの自尊心を満足させるものだったからである。なお、「漢族西方起源説」は、一般に、〈優者である外来の漢族〉対〈劣者である土着の非漢族〉という構図で、生存競争によって優勝劣敗に結果する、という筋立てになっていることに注意したい。

さて、この「漢族西方起源説」に見られる優勝劣敗という歴史観の登場は、珠江デルタ地域の歴史における由緒や正当性の叙述にどのような影響を与えたであろうか。この点を、優勝劣敗の歴史観を鼓吹した改良派知識人、梁啓超の故郷である広州府新会県を事例に検討しよう。史料は1908年刊『新会郷土志輯稿』で、これは梁啓超のいとこ譚鏞が総編輯として刊行したものである。本史料はすでに筆者の前稿²⁸⁾で利用している。しかしここでは、優勝劣敗史観の受容のあり方、珠璣巷伝説の構図との対比、等については検討しなかったので、今回改めて検討することにしたい。なお、新会県は珠江デルタの西南部に位置し、その地勢は県の東西で異なっている。西部は丘陵・台地だが、東南部は珠江デルタを構成するデルタのひとつ、新会デルタである。この地勢の相違によって、同一の県ではあるが、開発の時期や担い手が好対照をなしている。

史料2 1908年刊『新会郷土志輯稿』七・氏族²⁹⁾

（前略）漢代から唐代までに、北方から南に移住してきた者たちは、移住後に「山」を生活の拠点にしたので、いつしか新会県の粵民（越民）に同化していった。（中略）漢代から唐代まで、新会県に住む「民族」は「山」を生活の拠点にしていたので、県域も〔統治に便利するように「山」に〕近い場所に設けてこれらの「民族」を統治していた。（中略）南宋以後、県東南部の海辺は、西江（「鬱水」）の水流がここに注ぐため、次第に陸地になっていった。中原の土族で戦争などの難を避けて移住して来た者は、東南部の荒れ

地を開墾して自己の所有地としていった。河川に近い堆積土の田地は肥沃で、交通の便もよいので、後來の者が、逆に優勝の勢いを占め、人口も急増した。「山居の民」（移住後に越民に同化した漢族）³⁰⁾は、だんだん後來者に圧迫されてくるのを心配し、その同化した習慣（山居など）が同じであることに基づいて、新会県よりさらに西に住む「山獠」（新寧・恩平諸県の獠族を指す）と連合し、後來者の「新民」と敵対関係になった。「西寇」（県西部の「山居の民」とさらにその西の「山獠」）の擾乱は、明代の全期間を通じて起きた。これは新・旧の「民族」間における最も劇烈な競争である。談愷や陶魯が上記の反乱を征討したことによって、「新民」の生産・生活の基礎が固まり、また明朝に対して徭役や税糧を負担していたので、「新民」は自分たちを「土著」と呼ぶようになり、一方、「山居の民」を「客籍」と見なすようになった。現在、広州府所属の十四県の「民戸」はほとんど宋元時代以後に移住した種族で占められている。旧種は勢力が弱まり、新会県から遠方の県へ移住していった。新会県での拠点がなくなったため、人口は自然と減少していった。新会県に残った者は、姓を〔従属する新民の姓に〕変えて、新民に従属していくのである。（後略）

史料2に登場する人物を整理しよう。まず、北方から広東に移住してきた外來者については、①唐代までの移住者、②宋代以降の移住者に区分されている³¹⁾。つぎに、土着の者については、③唐代までの移住者と相互同化していく新会県土着の越民（具体的には峒獠を指す）、④新会県土着の越民とは別の、新会県よりさらに西に住む「山獠」（山地で移動式の焼畑農業に従事する獠族）に区分されている³²⁾。つまり、登場人物はさしあたり4種類である。

さて、①と②は、生産・生活空間が「山」（山麓・丘陵・台地）であるか、「陸」（デルタ低地）であるかで区分されている³³⁾。これは、技術面におけるデルタ低地の開発技術の有無に照応している。前述したように、低地開発技術の広東への移転時期は宋代以降である。したがって、技術の移転時期から唐と

宋の間で時期を区切るのは妥当である。

①唐代までの移住者は低地開発技術をもたないので、その生産・生活空間は必然的に「山」（山麓・丘陵・台地）となる。「山」には、同じく低地開発技術をもたない③新会県土着の越民が住んでおり、①と③とは次第に相互同化していく³⁴⁾。ここで、①唐代までの移住者が、漢から唐の時期に相互同化していった相手は、史料2では、さしあたり③新会県土着の越民とされている。ただし、のちの明代に、①唐代までの移住者と②宋代以降の移住者との間の生存競争が激しくなると、①は、広義の越民の風俗・習慣に同化しているので、④「山獠」とも連合して、②と競争するようになるという。

一方、②宋代以降の移住者は、その技術を用いて、宋代以降にデルタ低地を開墾していく。「山」には住まないで、土着の越民と相互同化する機会は少ない。そして、潜在的には肥沃な土壤が堆積しているデルタを開墾し、かつ便利な水上交通を利用することで、山麓・台地・丘陵に住む①や③の経済力を凌駕する経済力を得て、次第に「優勝の勢い」を占める優者になっていく。これと対比して、①唐代までの移住者は相対的に劣者となっていく、明代には「優勝の勢い」を占める②宋代以降の移住者との生存競争に敗れる、という筋になっている。

以上、史料2は、優劣の基準を、北方から移住してきた外來者か否かには求めず、北方からの移住者のうち、低地開発技術をもつか否かに求めていることが明らかである。唐代までの移住者は、北方からの外來者ではあっても、低地開発技術をもたず、その点で土着の越民と同レベルであるため、土着を征服する優者にはなれず、逆に土着と相互同化していくことになる。そのため、かれらは越民とともに「旧種」「山居の民」のカテゴリーに入れられ、最終的には②の後來者に征服される存在として性格づけられている。

史料2には、「後至者」「優勝之勢」「新旧民族競争」「旧種」等の語が登場することから、「漢族西方起源説」の優勝劣敗史観の影響を受けていることは明らかである。ただし、「漢族西方起源説」によく見られる〈外來の漢族〉対〈土着の非漢族〉という構図にはなっていない。北方からの移住者（漢族）のうち

の低地開発技術をもたない者は、劣者として征服される存在として描かれており、〈技術をもつ「陸居の民」〉対〈技術をもたない「山居の民」〉という構図になっていることが大きな特徴である³⁵⁾。

『新会郷土志輯稿』の優勝劣敗史観は、明代に珠江デルタ地域の主人公となる広府人を、宋代に中原から珠璣巷経由で移住してきた者としており、広府人に関する基本設定において、珠璣巷伝説との違いはない。一方、唐代までの移住者＝「土民」＝「土人」の取り扱い方はどうであろうか。明代の「土民」には、恒常的斉民化へのベクトルと、峒獠の動向に引きずられて反乱に加わるベクトルという、あい反する2つのベクトルが存在した。珠璣巷伝説は、このうちの前者のベクトルを後押しする方向で、「土民」と広府人との同質性・親和性を強調していた。しかし『新会郷土志輯稿』は、「土民」を低地開発技術をもたない劣位の者とし、非漢族とともに「山居の民」のカテゴリーに一括している。つまり越民（峒獠）との同質性・親和性を強調し、広府人とは序列化・差異化を図る方向であり、珠璣巷伝説における構図とは大きく異なっていることがわかる。

むしろにかえて

ところで、1949年刊、盧子駿増修『新会潮連蘆鞭盧氏族譜』所収の巻26・雑録譜「蘆鞭開族瑣記」は、『新会郷土志輯稿』の優勝劣敗史観の影響を受けて執筆されたもので、史料2と同内容の文章が引用されたあと、潮連郷独自の歴史が加味されている。しかし、この族譜の巻26・雑録譜「附録恩平盧氏族譜紀事」以下には、珠璣巷伝説が掲載されている。つまり、本稿において検討してきたように、珠璣巷伝説に登場する「土民」と『新会郷土志輯稿』の優勝劣敗史観が性格づける唐代までの移住者＝「土民」とでは、広府人に対する位置づけがまったく異なるのであるが、その二つが本族譜では、なんら矛盾がないかのように併載されているわけである。これは、珠璣巷伝説に「土民」が登場することの隠された意味や本伝説が作られた目的が、20世紀前半の珠江デルタの知識人、具体的には『盧氏族譜』の編修者、新会県潮連郷の盧子駿には理解されていないことを示唆する。その歴史的背景は次のように推測される。

まず、明末までに「土民」がほとんど姿を消し、逆に広府人の人口が増大して、広州府・肇慶府が広府人の世界となっていく。つぎにその結果として、清代には、「土民」に広府人への転化を勧誘する必要が減って、広府人と「土民」との同質性が意識される機会が少なくなっていく。かくして清末・民国期には、珠璣巷伝説に内包されていた意味や本伝説が作られた目的を真に理解できる広府人はほとんどいなくなっていた、と。そして、清末に優勝劣敗史観にもとづいて、広府人と「土民」とを優劣、征服者と被征服者の観点から差異化することが可能になったのも、如上の背景による。つまり、清末・民国期の広府人は、その祖先たちが受容した時の目的や意味を知らずに、自らの由緒を示す伝説を読解していたのである。

- 1) 越人とは、浙江省からベトナム北部にかけて分布していた非漢族を指す。単一の部族ではなく、多数の部族が存在していたので、「百越」ともいう。また、「越」は「粵」とも書く。現存する民族としては、猪族、壮族、ベトナムのキン族（ベトナム人）等がある。言語・生活空間・生業で大別すると、平地で水稻耕作を行うタイ語系と、山地で焼畑農業を行う非タイ語系とに分かれる。なお、本稿での「越人社会」は、現在の広東省、広西チワン族自治区、ベトナム北部に存在したものを主に指している。
- 2) 本稿は、片山剛「“広東人”誕生・成立史の謎をめぐって——言説と史実のはざまから——」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第44巻、2004年3月、および同「中国史における明代珠江デルタ史の位置——“漢族”の登場とその歴史的刻印——」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第46巻、2006年3月、以上の2篇の論文を基礎としている。内容的にこれらと重複する部分もあるが、本誌の特集に合わせ、由緒の問題を中心に構成しなおし、近代の部分は新たに書き加えた。また珠璣巷伝説についても新たな論点を加えた。
- 3) 漢族を、時間と空間を越えて普遍的に定義するのは難しい。本稿では、広府人を想定して、理念型としては、①王朝との関係で斉民（後述参照）であること、②漢族アイデンティティのみをもつこと、③漢語（方言を含む）を話すことができ、漢字の読み書きを志向すること、と定義しておく。ただし実際には、この理念型から離脱するベクトルをもつ漢族も存在するし、逆にこの理念型に近づくベクトルをもつ非漢族も存在する。

- 4) 日本では一般に広東人^{カントン}と呼ばれ、その言語も広東語と呼ばれている。
- 5) なお、同じところに、省東部の韓江デルタ地域では、やはり漢族のサブ・グループである潮州人が登場し、また省東北部の嘉応州でも、漢族のサブ・グループである客家人が登場し、それぞれ社会を形成していく。したがって、珠江デルタ地域における広府人の登場を、潮州人や客家人の登場とも関連させて考察する必要があるが、これは今後の課題としたい。
- 6) 片山前掲「“広東人”誕生・成立史の謎をめぐって」、同「中国史における明代珠江デルタ史の位置」参照。
- 7) 濱島敦俊「明代の水利技術と江南地主社会の変容」川北稔編『生活の技術 生産の技術』岩波書店、1990年、75-80頁。
- 8) 片山前掲「中国史における明代珠江デルタ史の位置」38、41頁。
- 9) 片山剛「清末広東省珠江デルタの図甲表とそれをめぐる諸問題——税糧・戸籍・同族——」『史学雑誌』91編4号、1982年4月、および片山前掲「中国史における明代珠江デルタ史の位置」。なお、珠江デルタ地域では、「里甲」と「図甲」は同義で用いられている。
- 10) 戦場で死亡する以外に、反乱者として処分を受けた後に明朝に帰順する、他地域に移る、過去を偽って広府人に転化する、等が考えられる。
- 11) 「新民」とは、反乱鎮圧後に齊民に転化した「新たな齊民」の意味であり、後段の史料2に登場する「新たな民族」の意味の「新民」とは異なる。なお、童試(科挙受験資格を得るための試験)の受験・合格枠としては、民籍枠が一般的である。その受験には、里甲戸籍の保有が必要とされており、これ以外の戸籍では受験を妨害された(片山剛「清代中期の広府人社会と客家人の移住——童試受験問題をめぐって——」山本英史編『伝統中国の地域像』慶應義塾大学出版会、2000年)。
- 12) 管見では、広府人の族譜に記載されている最も遅い里甲戸籍の取得年次は、永楽22年(1424)である。
- 13) 劉志偉氏や井上徹氏も、明代広東省の問題を考えるうえで齊民に注視している。ただし、辺境における漢族の非漢族化がいわれて久しいから、漢族と非漢族の交流について、非漢族の漢化・齊民化に言及するのみでは不十分であろう。齊民になっても、その後も齊民であり続ける保証はなく、(中間的存在)あるいは化外の民に回帰するベクトルが働くこともある。劉志偉『在国家与社会之間』中山大学出版社、1997年、井上徹「韜韜と珠璣巷伝説」(なお、目次には「中国の系譜と伝説——珠璣巷伝説を手がかりとして——」)とある)『文化資源としての宗族——中国の系譜と伝説——』大阪市立大学大学院文学研究科/都市文化研究センター/東洋史研究室、2007年。
- 14) 牧野巽「中国の移住伝説」『中国の移住伝説 広東現住民族考』牧野巽著作集 第五巻、御茶の水書房、1985年、262頁。
- 15) 片山前掲「“広東人”誕生・成立史の謎をめぐって」5頁。
- 16) 本伝説のバージョンは多いが、細部を除いた骨格はほぼ同じである。なお、牧野巽氏が別バージョンの部分訳を行っている(牧野前掲『中国の移住伝説』56-60頁)。
- 17) 「ある事件」については、その詳細をここでは省略するが、次のような荒唐無稽な内容である。すなわち、一人の妃が皇帝の宮中から逃亡して南雄に隠れ住んでいた。これを知った臣下は、この妃を亡き者とするために、妃とともに南雄の人々を賊として鎮圧しようとした。そこで珠璣巷の人々は急いで南雄から移住した、と。
- 18) 大良都は清代の順徳県大良堡を指すと考えられる。
- 19) この点は、片山前掲「“広東人”誕生・成立史の謎をめぐって」では指摘できなかった。
- 20) 牧野氏は「土民」を唐代の「土人」の末裔と考えている(牧野前掲『中国の移住伝説』259頁)。①~④のうち、②の設定は、後段で指摘する意味を付与されているので除くとして、①先住者、③齊民、④漢族風の姓、以上の3件は「土人」の特徴に合致しているので、牧野氏のように、「土民」=「土人」の末裔と考えてよいであろう。
- 21) 納税義務の条文を含む、雍正帝が作った聖諭広訓を掲載するものが多い。
- 22) 片山前掲「“広東人”誕生・成立史の謎をめぐって」。
- 23) 後述する漢族西方起源説も同様である。
- 24) この伝説を、王朝=官憲側が作ったのか、民間側が作ったのかは今後の課題である。
- 25) 履歴の仮構については、片山剛「明代珠江デルタの宗族・族譜・戸籍——宗族をめぐると史実——」井上徹・遠藤隆俊編『宋—明宗族の研究』汲古書院、2005年、参照。香山県の徐氏の北嶺系や「十排」が参考になる。
- 26) なお、民国以後は漢族ナショナリズムを抑制する必要から、中華民族ナショナリズムに転化する。
- 27) 石川禎浩「20世紀初頭の中国における“黄帝”熱——排満・肖像・西方起源説——」『二十世紀研究』第3号、2002年12月、16-17頁。
- 28) 片山前掲「“広東人”誕生・成立史の謎をめぐって」。
- 29) 史料2 1908年刊『新会郷土志輯稿』七・氏族。「(前略)自漢迄唐、北人南徙者、亦遂依山棲巢、久之遂同

(80頁へ続く)